秋桜

江連たけし

（一）

兄が急性の白血病で亡くなった。経過が良く「緩治緩解」のデータが出て、まもなく退院という矢先のことであっただけに、もうかれこれ半年を過ぎようとしている今でも、心に大きな空洞を残したまま、何する気力も失せてしまって、無気力な悶々した日々から脱却できずに、まるで、蝉の抜け殻のような始末なのである。

当時ロンドンに滞在していた弟は、航空便の都合などで、この葬儀に参列することが出来なかったが、この兄の死に際して何か思い当たることがあるのかどうか、一・二週間、しばらく兄が寝起きしていた書斎で、兄の身辺を整理したいということであった。身内の者も「それも良かろう」ということで、その弟に、初回の診察で即入院となり、再び、その書斎に帰ることが叶わなかった兄の、生前のままの、全く、兄がふっと帰って来るよう

な、その書斎の蔵書などの身辺整理をお願いすることとなった。

その弟が、再びロンドンには帰らず、そのまま現役を引退して、伊豆の山荘に籠もり、世間と没交渉のような生活に入ったということは、弟の身内の者の連絡で承知はしていたけれども、もうそろそろ引退の時期でもあるし、「引退したら、富士山の見える伊豆の山荘で暮らす」ということをかねがね聞いていたので、「もう、その時が来た」のかと、それほど違和感を抱くということもなかった。

その弟から、伊豆の函南局消印の手紙が届いたのは、この十月の半ばのことであった。その手紙の内容は、「是非一度伊豆の方に出掛けて来て頂きたい」ということと「家族は娘さんやお孫さんの養育のこともあり今までの大津市に残して単身で伊豆の山荘で生活している」ということと併せ「亡き兄の形見になるような庭を造りたい」というようなことであった。そして、その手紙の末尾に「徒然

草の吉田兼好法師のように、世間のしがらみを離れて、富士山を終日眺めながら、亡き兄のことなどを語り合いたい」ということが記されていた。

この弟の「亡き兄の形見になるような庭を造りたい」ということと「世間のしがらみを離れて亡き兄のことなどを語り合いたい」という文面が、その亡き兄のことで、言わば欝状態になって何するのも億劫な今の状態から抜け出る手掛かりになるのではなかろうかと、そんな思いで、久し振りの伊豆行きを承知したのであった。

（二）

函南の駅に着いて、町営の駐車場があり、直ぐに弟と半年ぶりに再会した。

「出て来ましたよ。途中で神田の古本祭りに寄って、この一週間のうちに読みたいような本を宅急便で送りましたよ。明日の午後あたり届くということだ」

「どうも、本当によく来てくれました。この

函南には、牧場と併設しての『酪農王国』という所で美味い地ビールを飲ましてくれるのです。それを是非味わって欲しい」

この函南の町は熱海と三島・沼津の中間にあって、川端康成の『伊豆の踊子』の舞台となった天城峠にも通ずる伊豆の玄関口ともいえるところである。

「伊豆というと、やはり、『伊豆の踊子』のイメージが湧いてきますね。この車中の広告で見たのですが、今年は川端康成生誕百年祭に当たるそうだ」

「川端康成生誕百年祭ですか。もう、ノーベル文学賞の川端康成も歴史上の人物ということなのですね」

弟は運転をしながら、何か感慨に耽っているような口調で続けた。

「川端康成が自殺した年は、思い出の多い年で、東京の本社勤務からロンドンに勤務を命じられた年なのですよ。あの時、そのことでどうするか、いろいろと悩んで、亡き兄と

三人で、あの秋桜の茂る高原山の麓のお寺に行ったことがありますね」

「ああ、そうか」と、つい先ほど東海道本線の車中で、たまたま神田の古本祭りで購入した『旅の仏たち』（毎日新聞社刊）という本の中の、栃木県矢板市の寺山観音寺の不動明王を目にして、この像には見覚えがあると、不思議な思いにとらわれていたけれども、川端康成が亡くなった昭和四十七年当時、亡き兄と弟の三人でその寺山観音寺に詣でて、そして、この本に出ている不動明王像を三人で目にしたことと、それにまつわる当時の思い出が鮮明になってくるのを覚えたのである。

「あの年は、亡き兄のお子さんが亡くなった年なのですね。兄はそのことで本当に落胆して、できることなら、私の命と引き換えにして欲しいと、怒り狂った不動明王のような形相で、その小さな亡骸を胸に抱いていた兄のことを、実は車中で思い起こしていました」

弟に神田古本祭りで偶然にも購入した『旅

の仏たち』のことや、その本の中に寺山観音寺の不動明王の木彫りの像が載っていることなどを織り交ぜながら話を続けた。

「あの時ですね。亡き兄は『徒然草』の『死は前よりしも来（きた）らず、かねて後（うしろ）に迫（せまれ）り』という一節を引用しながら、『川端康成は、死の神にその背後から抱きしめられたのだ』と、『川端康成は自殺などしたのでなく、そっと、康成にまとわりついている康成の死の神が忽然として背後から康成を抱きしめてしまったのだ』と、車中で何か忘れかけて、思い出そうとしていたのですが、そのことを今、やっと突きとめました」

弟は、突然その会話を遮るように、「一寸、待ってくれ」と、一時、車を停止して、「兄弟というのは、やはり、何かの折りに共通体験のようなものが、突然思い起こされて来るのですね」と言いながら、次のようなことを続けたのである。

「兄の葬儀の後、ただ一人、兄の書斎で兄の

蔵書などを整理しながら、そうそう、今言われた、『兄は、兄にまとわりついていた死の神に後ろから抱きしめられた』という思い以外に、到底、今回の兄の死についての適切な言葉は見付からないというのが実感なのです。その亡き兄の書斎に居ての、その思い、その『死の神に背後から抱きしめられる』ということは、あの皆若かった頃、三人して、矢板の寺山観音寺に行った時、その亡き兄が漏らされた言葉なのですね。そうそう、あの時亡き兄は、『死は前よりしも来（きた）らず、かねて、後（うしろ）に迫（せま）れり』と、それが、あの時以来、ずうと、私の生きる処世訓でもあり続けました」

弟と二人、もう何も話さずに、何時しか、弟の山荘に着いた。

（三）

弟の山荘は、弟のかってのロンドン時代の上司が最後に息を引き取った家とのことで、今回の「兄の形見の庭を造りたい」というこ

とは、正確には、「我らに取ってかけがえのない兄と、そして、弟に取って忘れ得ざる上司との形見の庭を造りたい」ということになろう。到着した翌朝、箱根の山を下に従えての見事な富士山が全容を顕わしていた。

その庭にしたいという急斜面に立って、その神々しい富士山を仰いだ時、弟のこの「庭を造りたい」というのは、さらに正確に言うならば、「生きている我らが眺める庭」ではなくて、「死者となった兄、そして精魂を込めてこの山荘を造り、ここで息を引き取った弟のかっての上司が、朝な夕なに箱根の山々や富士山を眺める所」ということであって、この山荘の庭は、その家の窓から眺望できる中景の箱根の山々と遠景の富士山という設計になっており、スペース的にも、今我々が整地をして、「秋桜院」との戒名のある亡き兄らに縁のある秋桜を移植しようとしている所は、その山荘の窓からは眺望することのできないような急斜面の所なのである。もうほとんど、

その庭にしようとしている急斜面の所は、弟が自力で整地をしていて、後は、二人して秋桜を移植すれば良いだけの手筈となっていた。

そして、その秋桜は、この山荘を立てた弟のかっての上司が眠っている、この山荘の下に位置する同じ函南の町の長源寺というお寺の庭から頂く手筈にもなっていたのである。

「待てよ。長源寺…、長源寺から秋桜を持ってくる…、その長源寺には薬師如来の坐像があるでしょう」

「いや…、その長源寺の、その薬師如来様を見て頂くのも、今回の、この函南に来て頂いた目的の一つなのですよ」と、弟は、私が、何故、長源寺とその長源寺の薬師如来像を知っているのか、さも不思議そうに言った。

「昨日、遅くまで、亡き兄のことや、亡き兄とかって三人して行ったことのある、秋桜が見事であった、矢板の寺山観音寺…、そして、その寺山観音寺の不動明王の話をしましたね。その思い出の不動明王が紹介されていた、あ

の『旅の仏たち』に、その長源寺の薬師如来像が一緒に紹介されているんですよ」

弟と二人、「世の中には、いろいろな偶然や出会いがあるものだ」とそんな会話をしながら、秋桜が燃え立つような長源寺の参道を経て、竹林を背にした薬師堂のこの長源寺の本尊である薬師如来像を拝顔した時、「ああ…、亡き兄の最後の顔…、この安らぎ、この静謐さ、この穏やかさ、この優しさ、この気高さ、この寛容さ、この柔和さ、この博愛、この美しさ…」、もう、発する言葉もなく、はらはらと零れる涙をいかんともすることもできなかった。弟と共にどれほどの時間が経ったのであろうか。その時、弟はつぶやいた。

「ああ、山の鳴る音…、地鳴りのような音ですね。山の音…、ああ、あれが川端康成が言われた山の音ですか…。『死は前よりしも来（きた）らず、かねて後（うしろ）に迫（せま）れり』の死神のような音ですね」

（了）